

## 特集「使うシステムから使えるシステムへ」の 編集にあたって

金田 重郎<sup>1,a)</sup>

本年 2012 年度も、情報システム論文特集号である「使うシステムから使えるシステムへ」特集号をお手元にお届けすることができました。投稿をいただいた著者の方々、査読委員・編集委員の皆様様に御礼を申し上げます。ご尽力をいただいた編集委員の皆様のお名前とご所属を、以下に、順不同・敬称略で列挙いたします。

幹事：畑山満則（京都大学）

委員：児玉公信（情報システム総研）、阿部昭博（岩手県立大学）、市川照久（静岡大学）、井上明（甲南大学）、魚田勝臣（専修大学）、大場みち子（はこだて未来大学）、笹嶋宗彦（大阪大学）、神沼靖子（情報処理学会フェロー）、刀川真（室蘭工業大学）、富澤真樹（前橋工科大学）、樋地正浩（日立東日本）、辻秀一（東海大学）。

本年は、12 件の投稿があり、最終的に 4 編を採録いたしました。投稿数・採録率は昨年度と比して大きな差はありません。投稿数がやや少なめなのは、最初に情報システム特集を企画した頃に比べると、複数の学会で「情報システムに関する特集」が組まれるようになっており、その影響があるかもしれません。投稿時期を 5 月のゴールデンウィークの前に設定したことも影響したかもしれません。次回の特集号については、投稿時期について配慮したいと考えております。

今回、編集委員会での議論を伺いながら、情報システム論文を書くことの課題を改めて感じました。情報システムを作った側が論文に込める「大きな物語」を、査読委員や編集委員に理解していただくことの難しさです。

情報システムは、ホロン的な存在です。本来は、どこか一部を切り出して議論することはできません。TOC, SSM 等のシステムシンキングでは、この視点は当然のものでしょう。著者は、ホロンとしての情報システムを理解してもらいたいとの「想い」を込めます。情報システム全体が実現する「対象ドメインにおける大きな物語」です。大きな物語を構成する要素をバラバラに取り出しても、「カラ

クリ」としての新規性はありません。

査読委員には、対象ドメインのことは分かりません。情報システムが深く対象ドメインの問題に入り込むほど、ドメインを知らない査読者に「大きな物語」を納得してもらうことは困難です。査読者は、真面目な「真理の探求者」です。従来の「サイエンス」では、真理の探求を行うには、要素分割して各ステップを検証するしか方法がありません。分析的手法以外、なかなか真理を証明する方法はないのです。

著者は、ドメインの課題を解決する「長い物語」を理解してほしいと論文を書きます。ドメインの状況を理解できない査読委員とのギャップは深刻です。真面目な査読委員は、従来のサイエンスの手法をつかって、ひたすら、論文のそれぞれの構成要素の量的研究としての正当性を確認に行きます。それは、「大きな物語」を理解してほしい論文著者からすれば、「小舅・小姑のコメント」となりかねません。

少なくとも、著者は、上記の問題を解決する一般的手法を持ち合わせません。社会と密接にリンクしているがゆえに、評価が非常に難しい「情報システム」を、要素分割的な視点で「証明」することは本質的に難しいと思っています。もう少し、要素分割的証明の正確さを追究するのではなく、「大きな物語」に重さをおいて、採否をご判断いただけないのかと情報システム論文を投稿するごとに感じております。

情報システム論文について、否定的なことを申し上げるつもりはございません。「カラクリの新規性」の時代は終わり、「どのように社会をとらえなおしてベネフィットを得るか」が問われている時代です。その意味でも、「情報システムと社会環境」という視点は、きわめて重要です。来年度の情報システム論文特集号は、8 月中旬締切として、ゲストエディタには、はこだて未来大学の 大場みち子先生を招いて、論文募集をいたします。どうか、奮って投稿をお願いしたいと存じます。

<sup>1</sup> 同志社大学理工学部  
Doshisha University Faculty of Science and Engineering,  
Kyotanabe, Kyoto 610-0321, Japan

<sup>a)</sup> skaneda@mail.doshisha.ac.jp